

平成20年度第4回三重県教育改革推進会議【議事録兼概要】

I 日時 平成20年7月30日(水) 10:00～12:30

II 場所 プラザ洞津「孔雀の間」

III 出席者 【委員】伊藤 博和、井上 邦子、上島 和久、大西 かおり、小笠原 まき子、川岡 加寿子、木本 博文、佐伯 富樹、田尾 友児、高橋 貞信、中野 義則、中村 武志、中村 真子、西田 寿美、向井 弘光、森本 敏子、山北 哲、山田 康彦

【事務局】向井 正治、鎌田 敏明、真伏 利典、松坂 浩史、平野 正人生、増田 元彦、山口 千代己、鈴木 繁美、大原 喜教、中谷 文弘
森下 宏也、丹羽 毅、北原 まり子、中原 博、安田 政与志

以上33名敬称略

IV 内容

1 挨拶

前回議論していただいた小中学校の適正規模については、審議に基づいてその後教育委員会に報告していただいた。今後の特別支援教育のあり方については、昨年度の議論に基づき、本年度から桑名地域での特別支援学校の整備等、具体的な話を進めている。教育委員会を巡っては、大分県の事件以来様々な報道がなされているが、本県においても制度にチェック機関を設ける等、公正を期している。こういう事については、一つの契機と捉え、より公正・公平な分かり易い制度にしていく事が必要と思っている。国からは教育振興基本計画が出され、当県の教育振興ビジョンも改定時期を迎えている。この推進会議では様々なご議論を賜りながら、明日の子どもたちにとって本当に必要な教育の方向性を示せるものとして、審議していただきたい。よろしく願いいたします。

2 報告事項

第3回三重県教育改革推進会議の概要報告について

…資料1・2に基づき、中谷教育改革室長から説明

資料1は前回の議事録概要であるが、委員の皆様にご一度フィードバックし確認していただいておりますので、再度確認いただきたい。資料2は、前回の主な意見抜粋であるが、小中学校適正規模のあり方部会、並びに特別支援教育部会からの報告をもとに議論いただき、これについては推進会議の報告として既に取りまとめられているので、確認という事をお願いしたい。

【会長】

報告書については、7月8日に教育委員会の方に、私と山田部会長と共に提出したのでご報告します。またその報告にあたり、各委員や部会のメンバーの方々に、改めて御礼申し上げます。どうもありがとうございました。

《以下質疑応答》

【委員】

議事録兼概要については、詳細な議事録は作成しているのか。作成していないのであれば、今回から作成して欲しい。

【事務局】

これまでこれ以上詳細な議事録は作成していないが、ご意見を踏まえ、もう少し深めた内容で次回から作成したい。

【委員】

是非詳細なものをお願いしたい。

3 審議事項

(1) 三重の教育の今後のあり方について

教育基本法の改正と教育振興基本計画について…資料3・4・5

三重県教育振興ビジョンについて…資料6・7に基づき、平野総務室長から説明

資料3の左側は、平成18年12月に改正された教育基本法について、昭和22年に制定されてから約60年、この間科学技術の進歩、或いは情報化・国際化・少子高齢化・核家族化・価値観の多様化・社会全体の規範意識の低下等、我が国の教育を巡る状況は大きく変化し、それに伴い様々な課題が生じてきたことから改正された。その中で国、地方公共団体が総合的かつ計画的に教育施策を推進するための基本計画を定める事について、新たに規定されている。右側は教育振興基本計画の概要であり、平成19年2月文部科学大臣から中央教育審議会に審議要請がなされ、本年4月18日に答申がなされ、7月1日に閣議決定された。

資料5は教育振興基本計画本冊であるが、資料4の概要で説明したい。第1章わが国の教育をめぐる現状と課題、第2章今後10年間を通じて目指すべき教育の姿、第3章今後5か年に総合的且つ計画的に取り組むべき施策、第4章施策の総合的且つ計画的な推進のために必要な事項というような構成になっている。

資料6は三重県教育振興ビジョンの抜粋である。平成9年8月策定委員会を設置し、新世紀における三重の教育のあるべき姿について諮問し、平成11年1月に答申をいただいた。県の総合計画である「三重のくにつくり宣言」と整合性を図りながら、策定した。第1部総論、第2部各論で構成され、総論は3つの基本目標と5つの重点目標と31の施策を示し、三重県の教育のめざす目的を明らかにしている。策定期間は平成11年から平成22年度までの12か年の計画になっている。

《以下質疑応答》

【委員】

三重県教育振興ビジョンは、平成19年度から平成22年度まで4か年の第四次推進計画が今動いているところだと思うが、教育基本法が変更になったことで、何か変更しなければいけない事が発生してくるのか。平成22年までそのままやり、それ以降見直しがかかるという形になるのか。

【事務局】

現在平成19年度から平成22年度ということで第四次推進計画がスタートしており、今年が策定2年目である。この第四次推進計画については、県の長期総合計画の第二次戦略計画と歩調を合わせたような形で、策定をしている。教育を取り巻く様々な課題等についても、その時点で出来るだけ反映をさせて定めている。

【副教育長】

教育振興ビジョンを作った段階での推進計画の期間が途中で変わり、これまで第一次推進計画として平成11年から13年、その次に第二次推進計画で3年間、そして第三次は2年間という事で進め、予定を超えて第四次推進計画として昨年の7月にこの計画を出した。作ってから相当年数が経っており、その段階でいろんな国の動きもあり、所々変えていくべきところを計画の中でカバーして進めてきている。従って計画期間まではこのままで進めていきたい。

教育基本計画と三重県教育振興ビジョンの比較について

…資料8に基づき、平野総務室長から説明

資料8は表の左側が教育振興基本計画、右側が三重県教育振興ビジョンの第四次推進計画であり、その比較である。取り組み内容が合致するわけではないが、同じような方向での取り組みがされているものを対応させてある。ビジョンあるいは推進計画で抜けた部分については、網かけをしてある。

【委員】

改正された教育基本法第17条で、国・都道府県また地方公共団体、市町村がそれぞれの教育振興計画を策定するという事が謳われているが、県としては今後どのようにする予定か。教育振興ビジョンで代用させていくのか、新たにきちっとしたものを作成していくのか。今後振興ビジョンの事を計画なり審議していく上で、大きな曲がり角になると思う。方向を明確に教えていただきたい。国の教育振興基本計画は、教育基本法あるいは関連の三法、また学習指導要領を実施する上で根拠となる、あるいはこれがあって初めて施策を実現できるものではないかと思うが、残念ながら数値目標等がなされていない。県としてこれをどのように考えているのか。或いは今後どのように対応していこうと思っているのか、県としての考えを聞かせてもらわないと、話が前へ進まないで教えて欲しい。

【教育長】

国の教育振興基本計画に数値目標が入らなかったのは非常に残念に思っている。今後日本の教育のあるべき姿の方向性を示して数値目標を置いておこうという時に、金とか人員に関して、それだけのバックとなる確証を財務省に得られないと、この計画に載せられない。教育立国という大きな流れの中で、政党なり国民なりの盛り上がり、少し欠けたのではないかという気がしている。しかし、非常に重要な事柄なので、今後さまざまな機会、例えば次年度、次々年度の国家予算要望などにおいて、各都道府県なり、各界からの盛り上がりもあって実現していくような方向性で、今後は頑張っていきたい。

【事務局】

教育振興ビジョンを策定するにあたっては、当然事前から準備を進め、計画的に進めていく必要がある。次期教育振興ビジョンについては、策定に当たっての基本的な考え方や、策定スケジュールも検討しながら、この場でいろんなご議論とかご意見をいただきながら、準備をしていきたいと考えている。教育振興基本計画との関係については、各地方公共団体の独自性が尊重され、国の計画は参考として取り扱えばよいということである。現在の教育振興ビジョンが、国で定めている教育振興基本計画にあたるかと考えていることから、次回についてもそのような考え方でいきたいと考えている。

【副教育長】

前回ビジョンを作る時には策定委員会を設置し、そこで議論をし、答申をいただいた。今後、平成23年度からの新しい振興計画に当てはまる三重県版のものについて、この委員会で議論していただけるかどうか、会長さん中心に相談させていただきたいと思っているので、よろしく願いしたい。

【委員】

次期三重県教育振興ビジョンの策定については、さらに別の委員会等を作るという事か。国の基本計画と三重県教育振興ビジョンとの比較の中で、国にあって県にないものには網掛けがしてあるが、国の基本計画の総合的な学力向上策の実施という部分には、網掛けがなされていない。県の教育振興ビジョンでは学力向上策が記述されていないことから、この部分は網をかけるべきだと私は解釈している。ここがきちっとしないと、議論の一つのポイントがぼけるおそれがあると思う。三重の今後の教育を考えていく上での資料として、小中それぞれの学習要領が改訂されたので、その基本的な理念の部分ぐらいの資料は提示する必要があると思う。現行の振興ビジョンの策定の際には、平成11年3月告示の学習指導要領の内容との整合性を図りながら、作業を進めた記憶がある。よろしく願います。

【教育長】

今後、教育基本法改正に基づく国の教育振興基本計画の、各都道府県教育委員会版を作成する必要があるが、これをどういった場でやっていくのかについては、附属機関を設けていくのか、この教育改革推進会議の場をそういったものに設定していくのか、今後の検討事項である。行政機関の附属機関としての位置付となると、議会の方との協議も必要である。今回議論していく中では、次期三重県教育振興ビジョンとなるか、三重県教育振興基本計画としていくのかという位置付けの問題が一つと、それを審議する場としてどういったものを作っていくか、今後各方面との協議も重ねていきながら、進めていきたいと考えている。基本的には、既に教育改革推進会議という場があるので、できる限りこういった場で作っていききたいという気持ちであるが、そこだけで決めていけないものでもない。

【副教育長】

網掛けの部分は、全く触れてない部分である。中身については、今の時代に合っていないという部分も含め、議論いただけたらと思う。したがって、全く項目が出ていないという部分だけを網掛けしている。学習指導要領については、今後必要な時に準備させていただく。

【委員】

平成22年度まで四次の推進計画に基づいて進行していくという事を考えた場合、網掛けの部分について、具体的な施策として取り入れていくことも検討していきながら、22年度以降の新教育振興ビジョンへ流れていくような事をやっていくのが、国の振興計画を見据えた、よりスムーズな流れになると思う。そういう事も踏まえながら検討して欲しい。国の振興計画を受けて県としての振興計画を立て、当然それを受けて市町も振興計画を立てなければならない状況になるが、「県はこういうような教育を進めていきます。この部分については各市町でお願いしたい」という事が明確に出されてこない、市町の振興計画を立てる上で齟齬が出てくるし、立て難い部分がある。県の振興計画に基づいて「県はこういう事をやっていきます。この部分についての補完を市町でしっかりやりなさい」という事になれば、それに伴う市町への指導なり、或いは助成なりを考えた裏付けを持った位置付けでないと、市町としてはそれに基づいた振興計画を立てにくいものになってくるし、実効性の薄いものになる。先を見据えたものであって欲しい。

【教育長】

多様な主体に期待するものとの記載があるので、これについては一定限計画の後で評価を行い、その上で今後作っていく時に、こういった会議等も含め議論した上で、お願いしたい部分、県として主体となってくる部分というのを切り分けていかないといけないと思う。三重県教育振興ビジョンの第四次推進計画については、三重の教育力向上プログラムという目標を掲げて、それに対して今ある事業を当てはめ、その事業に力を入れる事によってプログラム目標を達成するというような構成になっているので、この中ではまるきり新しい形で出てきた分には対応しにくいものである。しかし教育振興基本計画に基づいて、今後の概算要求等で国の様々な事業が出てくるので、それを受ける形については、必要な新しい視点での事業というのは見直しを図っていく必要があると思っている。

【委員】

教育振興計画については、新聞によって文科省完敗というようなことが出たが、ここに書いてある施策はすべて財政的な措置を伴うものばかりであり、今後果たしてこれをやり遂げる力量が文科省にあるのか心配している。国の教育振興計画を参酌しながらと書いてあり、それぞれの地域、地方の実情に応じて教育振興計画地方版を定めるべきだと考えているが、先ほどから三重県教育振興ビジョンとの比較に重点が置かれているような気がする。これだけ網羅しているのだったら十分参考にしていると思う。子どもや三重の教育の未来像から議論の出発をするべきだと考えている。この推進会議で次期ビジョンの議論をしていいのかどうかという事については、慎重に考えて欲しい。設置条例との関係で整合性がとれているのかどうか、後々この会議にビジョンの議論を任せていいのかどうかの議論が、議会等で起こらないかどうかということも考えて欲しい。私たち委員がビジョンの作成に関わる覚悟と責任を、もう一度自覚して議論をしていかなければいけないということにもなる。現行の教育振興ビジョンの教育長挨拶文には、「既存の制度や法律に縛られる事なく、真に未来を支える子どもたちにとって必要とされる思い切った提言」をお願いしている。また「県民の皆さまや中高生の皆さんにもご意見を寄せていただく」、こういう姿勢はやはり貫くべきだと思うので、是非大事にして欲しい。

【会長】

中村委員の方からいろんなご意見、或いは要望というのをいただきました。私たちも含めて事務局の方によりしくお願いいたします。

教育改革推進会議・部会意見からみえる教育課題について

…資料9に基づき、中谷教育改革室長から説明

資料9はこれまでの会議、或いは3つの部会の中で出された現状と課題とか、この会議で検討すべき事項についてまとめたものであり、1番から5番までが教育内容の意見、6番からがそれを実践するための仕組みとか方法等をまとめてある。1は確かな学力の確立、2は豊かな人間性の育成、3は豊かな心や健やかな体の育成、4は幼児期からの一貫した教育の推進、5は特別なニーズに対応した教育の推進、6と7は関連するが、地域や家庭の教育力向上と連携・協力、8は開かれた学校づくり、9は教員養成と研修、10は安全・安心な教育環境の整備、11は地域に支えられる学校経営と学校評価の推進である。

【委員】

ビジョンを出してもらったらすごくやり易いが、これを落とし込んでいくのに、市町レベルまでやって欲しいと思う。シルバー人材で大変優秀な方がいて、学校をサポートできるような舞台ができつつあるが、全部ただである。教育委員会や市町や議会に予算要求をすることで、いくつか施策ができていく。この会議で出される高い次元のものが、現場でいかに実行されていくかが問題である。こういうビジョンを出したら、市長や町長が集まった場所で教育予算の充実を投げかけることで、よりスピードが増していくのではないかと思う。市や町の実例があったら、そこへ行って教えを請うことで学校経営品質は上がり、優れた市や町ができあがる。そういう事をしていきたい。この推進会議・部会意見から見える11項目の教育課題を現場でやりたいが、それには予算もいるので、教育委員会の方から各市町に訴えて、予算を投入すべきだと思う。今の時代は家族一体で学校に大変厳しい意見をする場合があるが、専門委員会を設けることで解決しつつある。社会全体で教育向上に取り組むというのは、全ての項目にわたって品質が増していくと思っている。この施策が現場で実行できるような事をやってもらえれば、現場でやる者としては大変嬉しい。

【委員】

三重県らしい教育改革なり、教育計画を作っていく必要があるのではないかと思います。三重県の将来を支えていってくれる人材をどうやって育てていくのかを念頭に置いた計画を、考えていく必要があるのではないかと考えている。一回出て行っても、三重県にまた戻ってきてくれたりしながら、三重県の発展を支えてくれるような人材を、総合的にどうやって育てていくのという点を忘れない計画を作っていけたら素晴らしい。地域と教育の関係について、学校が地域づくりと結びついて存在していかないといけない事を痛感した。単に学校だけを作るのではなく、地域づくりと結びついた学校づくりというのを進めていく必要がある。それは今後の振興ビジョンを作る時だけではなく、現在の第四次推進計画の中でも工夫していかないといけない事だと思う。学校と地域との関わりを、もっと多角的な形で関係を作っていく、そういう視点も新しく出てきている。今までと少し違う新しい学校地域の経営感覚、本当に総合的に学校を支え、地域が支えていくような、そういう地域づくりと学校というのを、今から進めていって欲しい。高等教育のところで、三重県に残らない高校卒業生がどんどん多くなっている。しかもそれが東海地区にも残らず、関西や東京の大学に行く率が増えている。大学ももっと高校生にとって魅力ある形に作っていかなくてはいけないと思うが、三重県の高等教育が連携して、若者を支えていくような関係を作っていかなくてはいけないと思う。県としても高等教育を支えていただいたり、注文を出したりしていただきたいと思う。

【委員】

三重県としてどんな人を創っていくのが、振興計画の中に見えてくるといいと思う。自分たちの町で自分たちの町の後継者を育てていく、更に伸ばしていく子を育てていく事は町の願いであり、地域の願いでもある。そういうような事を目指せる教育がどんな事で出来るのか、市町の振興計画を立てる中で考えていく事は大事だと思う。一人ひとりを大切にしたいきめ細かな教育という事はいろいろな所で言われているが、それがどのような事か、そのためにはこのような施策が必要かを、今度振興計画に載せる中で深く突っ込んで掘り下げていく事が大事であると思っている。社会性を向上させ子どもたちの心を育てるという事について、具体的に県なり市町なり、あるいは地域なり家庭それぞれのところで、どういう事を共にやっていく事で目指す子どもたちが育っていくのかという事をしっかり討議をしていきながら、振興計画の中に落とし込んでいく事が大切であると思う。

【委員】

今子どもとか親とか地域もいろいろ変わってきて、毎日保育の現場でも大変な思いをしている。子どもの心を育てる事が大事であるという事を、日々の保育から感じている。幼稚園教育要領と保育所保育指針が来年4月から施行となり、各園にて同じようなカリキュラムでこれからやっていく予定である。木に例えたら根っこの部分、基本的なところを私たちは育てており、あとは小学校、中学校、高校でそれをいかに伸ばしてもらおうかである。一貫した教育を目指し、小学校との連携を推進している。我慢できない、自分本位の子が今たくさんいる。三重県の教育計画の中にも、人間性や心を育てるということ、三重らしいところも考えて入れて欲しいと思う。

【委員】

私は児童精神科の医療現場で働いているが、30年位の間に子どもの数が半分になっているのに、私たちが関わらなければならない子どもはどんどん増えている。たくさんの先生がアドバイスを求めにみえるが、若い先生が打たれ弱くなっている。人材育成と言えば、先生に元気になってもらわないと困る。30代40代ぐらいの先生たちも挫折に弱く、身近でサポートしてくれる同僚がいないのではないかと思う。地域の人材とか打たれ強い世代をサポートに回すのもいいアイデアだろうと思う。子どもたちを育てる前に、子どもたちに関わる先生たちをどう育てるか、どう子どもに向き合える先生にするかという事が急務だと思う。ビジョンは平成9年からいろんな事を考えて用意をされているが、具体的にどうするか施策が不十分だったのだろうと思う。あすなろで毎年開くシンポジウムのテーマを「切れる子どもたちの対応」としたが、いつもは大体400名ぐらいの希望者数が、今年はなんと850名を超えている。そのぐらい切れる子どもに関心があり、困ってみえる。そういう困り感が現実にたくさんあって、しかも現場で困っている人たちがたくさんいる。三重県で具体的にどうするか知恵を絞らないと、きっと変わらず、どんどん学校現場でそういう崩壊が起こり、まず先生が休む。そういう事のないように、先生が元気になるような施策をこの改革推進会議で考えてほしいと思っている。

【委員】

こういう会議で考えるビジョンを、現場でいかに浸透していくかというのが一番の問題だと思う。子どもを育てる事の責任、子どもとの関わりがいつからこういうふうになったのかと思う。保育園、幼稚園、小、中、高の各先生と、いい出会いもあると思うし、ちょっと残念な出会いも子どもの中にもあるかも知れない。でもそれを支えるのは親ではないといけないと思う。自分も高校を出てから関東の方に行ったが、両親の事を考えて帰ってきた。高校を出た自分の息子も京都の方に行っているが、帰ってきそうにない。親としては家を出て一人で暮らすというのは、成長過程の中で一つの喜びであるが、その後帰ってくるかどうかは子どもに任せるしかない。現場の声、親の声、本当に困っている人たちの声を文字に表すのは難しく、また逆に文字になったものを現場の人たちに浸透してくのは難しいだろうと思う。でもそこを先生たちの力、親の力、いろんな力を出し合って、みんなが本当に力を合わせて子どもを守るような、そういう意識を持ってこういう会議にも反映できたらと思う。

【委員】

学校にはたくさん課題があるし、病んでいる人も含め、教職員にもいっぱい課題がある。子どもにこうして欲しいという事を挙げたらきりが無いと思う。課題を掘り起こすことも大事であり、やらなくてはいけないが、小さな取組であるが課題を解決しているところがある。それを繋ぎ合わせたり、応援したりしていくというのも大事であると思う。子ども同士が一生懸命何とかしたいという動きはいっぱいあり、それを支える教職員であったり保護者であったり、地域の人たちも必ずいると思う。そういう小さな小さな取組を集めた上でビジョンを考える、三重の教育の現状やあり方を考える、というのも大切な作業ではないかと思う。

【委員】

私の小学校では、今3年生が72人、2年生が76人、1年生が73人である。73になると、三重少人数で3クラスになり、72では2クラスである。3年生が72で36・36のクラス、1年生は25・24・24のクラスである。この10人の違いが、この年代の子どもたちにとっては非常に大きい。三重少人数というのは、本当に有難いと思う反面、3年生の落ち着かない様子を見ていると、ボーダーで入らないところについてももう少しなんとかならないかと思う。特別支援学級に入っている、入っていないに関わらず、様々な子どもたちがいる中で、ある程度少ない人数にしてもらおうと、学校にとっては有難いというのが実感である。10数年学校現場から離れて、8年前に学校へ戻ったが、子どもたちはそんなに変わっていないのに、保護者や地域が変わったというのがその時の第一印象であった。しばらくしてもうひとつ感じたのは、学校がいろいろなものを中へ入れてしまったという事である。今まで地域なり保護者なりでやっていた事を、学校へ入れ込んでしまった。何とか教育という名前のつくものが、20年前から比べたら飛躍的に大きくなり、学校でやっている現状がある。地域と学校との連携という意味で、それぞれの役割をもう一度議論してもらいたい。保護者なり地域なりで子どもたちを支えてもらっていたものが、支えてもらえなくなってきたという印象を強く持った。

【委員】

亀山の方で工場をやっているが、ある小学校から5学年4クラス160人ぐらい全員見学させてくれという連絡を受けた時、人数が多くて大変だと思った。具体的に打ち合わせをしたら、ある教育プログラムがあり、その一環としての工場見学であった。その前段から全部で9時間の単位を担当の先生が協力して分担をし、学年全員で学習していた。ある企業が目的や狙いを持って立地し事業をするというストーリーになっており、その中の一つの実地体験として工場見学をし、帰ってから体験した事をもとにレクするというシナリオになっている。この生徒さんたちは幸せだと思った。ひとつのプログラムとして、会社の存在意義とか、気をつけていること、職場の様子などを組み立て、非常に理解を深めるのではないかと関心をした。そういうプログラムを作ってミートしてくれると協力しやすく、嬉しい。そういう部分で上手く民間企業を利用してくれたら、光栄と思う。団塊の世代の方が今60歳前後で、企業にもハッピーリタイアされる方が多い。そういう方を社会と教育の両方で活用してもらえそうな仕組みがあれば、彼らも嬉しいだろうと思う。60歳過ぎても元気な企業マンは多く、特に環境関係については工場の場合力を入れているので、教育に活用してもらえればと思う。

【委員】

文科省なり県内の教育振興基本計画を見て、良くまとまっていると思う。逆にこういう事は、当たり前のような気がする。学校現場で本当に何が困っているのかという事をもっと突き詰めていかないといけないと思う。15年ほど学校を保護者として見ているが、学校は周期的に荒れたり良くなったりする。中学校が荒れる時は、その前に小学校の方の先生がちょっと甘い考え方でやっていたら、中学校にしわ寄せが行く。今一番困ると思うのは、先生方をどう支援していくのかということだと思う。例えば不登校とか、いじめとかがあった時に、親も一緒に学校に怒鳴り込んでくる事があり、そういった対応が今一番難しいという気がする。最終的に自分の子どもが一番困るという事を言いたいが、なかなか理解してくれにくいところをたくさん見ている。支援策を考えていかないと、本当に優秀な先生が辞めてしまう事になってしまうので、そこら辺をもう少し考えていくべきではないかと思う。

【委員】

伊勢市に住んでおり、年に1回七夕前後に勢田川を大掃除する。町の皆さん、お年寄りの方ばかり30人ぐらいでその川の掃除をしていたら、伊勢工業高校の生徒や先生が280名ぐらい一気に来て、手伝いをしてくれた。川沿いの草刈りからごみ拾いまでやってもらい、あっという間に綺麗に片付いた。これを保護者地域の住民として見ると、これが地域との連携かなと肌身で感じた。地元のおじいさんたちと話をしながら和気あいあいとしていた。少子高齢化の中、学校全体で地域の事に取り組むことが、ボランティア精神にも生かされるのではないかと思った。伊勢工業高校に地元住民として感心をした。地域との連携という話が出ていたが、これがその一つなのかと感じた。地域が沈静化していく中、地元の高校生がこのようなボランティア活動する事によって、地域との交流、活性化になっていくのかと思った。

【委員】

国の教育振興基本計画も、財政的な予算措置部分に何等触れられること無く、閣議決定されてしまった事について、がっかり感が強くある。反対に三重県の振興ビジョン作成に関わっては、我々現場の教員達も素案を真剣に読み、パブリックコメントに意見を出し、真剣に回答いただいた。そういう経緯を経て第4次推進計画が出されているという事については、誇るべきものではないかと思っている。ただ時代は変わっており、新たな課題も生まれているのは確かなので、10年後5年後の確かなビジョンだけでなく、緊急的なものから手を入れ、予算を入れ、改革をしていって欲しい。子どもの事を一番良く分かり、子どもに近い市町や県から、足りない国の施策に対して揺り動かして、声を大きくして言って欲しい。子どもたちの本当の姿、真面目に一生懸命に頑張っている現場教職員の苦勞、それぞれの学校にある素晴らしい教育実践、そういう事を知る事も議論する事もなく、小手先だけの修正だけとかまやかしにも似た教育改革をしてもらっては、時間や予算の無駄遣いであると思う。時間的なゆとりと教員の誇り、心のゆとりがあれば、子どもに真剣に向き合えると思う。一人ひとりを大切にするという事は、一人の教師が一人の子どもの人生と真剣に向かい合って、その子の困り感にどこまで立ち向かえるか、同じ方向を向いて歩んでいけるかであると思う。逃げる事なく真剣に向き合える教師の姿が子どもをひとつ前に向き合わせる事ができると思う。一人の子どもの人生を大事にするためには、育ちのリレー、一貫した人づくりというのが正しいのだろうと思っている。学校現場や教育行政のみを批判したり、バッシングしたり、叩きのめす事が子どもや保護者の心を反対に不安に陥れているという事や、ひいてはそれが学校教育全体への不信に繋がっているという悪循環を、子どもに関わる大人全てが断ち切る努力をしていかななくては、本当の素直な子ども、真剣に生きる意欲を持った人間を育てる事は出来ないのではないかと思う。子どもに接する教員は、いつも自分を開発し続ける努力をしていく必要があると思う。今あまりにも何々教育というのが多過ぎて困るが、生きる力を確かに育てる方策のひとつとして、キャリア教育というものを真剣に学校現場が捉えていかななくてはならないのではないかと確信している。

【委員】

4月に入社した社員が一週間に2回ぐらい帰りが遅くなったら、親御さんの方から「なんとか考えて欲しい」という電話をいただいた。今は親御さんの教育が必要だというのを、しみじみと感じた。教育担当の者に、本人が職業感とかをどう思っているのかよく聞いて、親子でよく話し合うよう指導して欲しいと言った。シルバーの方もいるが、職業奉仕、社会奉仕を理念に置いて活動しているロータリークラブの会もある。子育てや親育ての機会に、大いに活用して欲しいと思っている。

【委員】

環境教育や地域の教育力を生かした教育を提供する団体にいるが、最近夏の体験に来る学校が増えてきた。自然体験活動や環境教育に理解が増えてきたのかと思っている。結構リスクがある活動を児童に勧めたり、専門団体を信頼してくれたりする先生方もいる。自閉症や障害のある子どもたちもいるが、川の中に入ったり、山の中に入ったりすると、感情表現がとても豊かになったり落ち着いたり、良い傾向が見える。統一テストなどの点数に影響する訳ではないが、自然の中には人を癒したりする効果があるのは確かだと思う。今後の三重県のビジョンの中にも、自然体験活動の重要性等を明記して欲しい。農水省の農林漁業の体験企画とか、環境森林部の森林環境教育企画とか、学校教育分野に進出してきているところがあるが、そういったところと教育委員会が足並みを揃え、今後連携を強めて行って欲しいと思う。そうすればビジョンに盛り込まれた内容が、さまざまな方向から具体的に実現可能になってくるのではないかとと思っている。

【委員】

教育長として、現場の様子をしっかりと掴んだ上で、教育の施策、教育行政に生かしていくことを大事に進めている。教育基本法が改正され関連する法案や改訂学習指導要領が次々に出されてくるが、それをどうやって解釈し実践していくか、実態をしっかりと踏まえた中で、知恵と工夫を出し合って取り組んで欲しい。批判ばかりしては前に進まないし、失敗を恐れているは何もならないから、どんどん実践をして欲しい。上手くいかなかったら柔軟に早く対応するという姿勢を貫いて欲しい。食教育の充実と言われ、アレルギー対応をしなければならない子どもも増えてきて、その重要さはよく分かるが、その重要さがあれば、栄養教諭や職員をきちんとした定数付けする対応をやっていかないと、本当の充実した教育は進まないのではないかとと思う。国は定数法の中でだけで、あとは市町でとなると財政力での格差が大きくなっていく。それを補完するのが県の立場ではないかと考えている。一定水準を確保し、義務教育としての責任を遂行できるような体制づくりを市町はするが、足りないところの補充を県にお願いしたい。大きな観点で国からも支援をしていただくのが大事なことであって、義務教育は本来子ども達が一生の中で基礎的な事を身につけなければならない期間であり、それぞれの立場が条件整備をしっかりとやっていかないといけない。県のこの改革推進会議で、現場に生きてくるような議論をし、机上のプランに終わらないようやって欲しい。教育の一番大きな担い手が人であり、教員は打たれ強くあって欲しいが、ちょっと上手くいなくなるとなかなかそれから立ち直れない。いろいろな悩みを持っている先生もたくさんいる。広い悩みを持った、或いは自分自身も弱いと思っている先生をどうやって支援をしていったら良いのか、大変大事な事だと思う。今は管理職も打たれ弱くなっているが、それをどうやって解決していくか、大変大きな課題である。県教委の方でも、研修の機会なり悩みを聞き、支援していく体制を作って欲しいし、またその方策について話ができればと思っている。

【委員】

来年度から幼稚園教育要領が改訂になるが、幼児教育の質の向上という点では、既に前例踏襲的なやり方ではなく、新しい発想の中で就学前教育をしている。家庭の教育力や地域の指導力等が合い絡まって、就学前教育ができていくと考えている。新幼稚園教育要領には、預かり保育、子育て支援という新しい項目が入ってきている。子育て支援については、保護者の理解と協力が必要になってくるが、最近の保護者の様子を見ると、なかなか理解が望めないような方もいる。津市で子育て支援センターは、幼稚園の先生や地域のボランティアを使って、週に1回の形で場所を設けている。あとは各幼稚園で未就園児の遊ぶ会をしている。本幼稚園では、幼稚園教員の資格を持った者が3人いるが、その中で園長である自分一人がフリーなので、週1回の未就園児の遊ぶ会を担っている。お母さん方のボランティアとか、地域の主任児童委員を活用しながらしている。在園の子ども達が怪我をしたとか、保護者の思いを聞く時間を取りたいと思っても、なかなか時間が取れない。子育て支援をしていくには、やはり人や予算が重要になってくるのではないかと思う。郡部の方では預かり保育をしているが、4時位まで預かり保育をすると、残り1時間15分で保育日誌をまとめながら反省をし、フィードバックをして、明日の教育を考えなくてはいけない。これでは時間が足りない。預かり保育を担う人員の確保をして欲しい。教育要領に新しい事がいろいろ書いてあり、もっともな事だと思うが、それを今いる幼稚園の職員が担うというのは大変難しい。幼児教育の質の向上と言われているが、そのための予算をつけて欲しい。津市においては、幼稚園と小学校で教諭の人事交流が行われ5年目に入り、幼稚園と小学校の連携した教育が年を追うごとに進んできていると思う。幼少連携で一番大事なものは、相互の共通理解だと感じている。「生きる力の基礎を育む教育として」とか、「就学前から小中高への一貫した系統立てた指導」というような事は全て繋がってくるのではないかと思う。津市教育委員会で大きな事業として取り上げてもらっていることから進んでくるのではないかと思うので、県教育委員会としても支援して欲しい。

【委員】

現行の教育振興ビジョンが策定された9年前と比べて、子どもたちを取り巻く社会環境はかなり厳しくなってきたと認識している。今の高校生を見て影響を大きく受けているところがある。例えば、いろんな面で二極化が進行し、意欲についてもいろんな事に意欲を示している生徒と、意欲を持たない、持てない、持とうとしない生徒たちがいる。学習時間も確保している層と、そうでない層ができてきて、その差が開いてきているし、片方の極の層の数が増えてきているような気がしている。今学校現場はこうした片方に偏って増えてきている層への対応が、非常に大きな課題になっている。教員の精力はおそらく半分以上はそこへつぎ込まれているのではないかという気もしている。しかし学校現場は非常に忙しく、子どもと向き合う時間が9年前と比べて少なくなってきた。本来教育にかけるべきエネルギーがさかれないような改革の方向、システム作りというものが求められているという気がする。ゆとりか詰め込みかという議論が盛んになされた経緯があるが、どちらが大切かという問題ではないだろうと思う。学習の形態で言うならば、知識を習得するやり方と課題を探求するやり方が今盛んに言われてやられているが、両方大事だと思う。次期三重県教育振興ビジョンには両方にシフトした内容を盛り込んでいく必要があるのではないかと思っている。

【会長】

皆さんありがとうございました。それでは本日の協議をこれで終わらせていただきます。

4 その他

連絡事項

次回の会議につきましては、諸般の都合により、10月の中旬以降を予定しております。その後の日程につきましても第5回の会議のところでお話をしたいと思っておりますのでよろしくお願い致します。本日の資料として国の基本計画と三重県教育振興ビジョンの第4次の推進計画2冊お渡ししてありますが、次回以降の会議でも使いたいと思っておりますのでお持ち帰り頂きまして、また次回お持ち下さい。本日はどうもありがとうございました。

以上